

# 動機づけの価値志向性とプログラム・ローディングの行動特徴

田中 敏

(上越教育大学)

今日の動機づけ研究に見られる主体論・相互論の観点ではなく構造論の観点に立った研究構想を提案する。

## 1. 動機づけの価値志向性

主体は（あらかじめ社会が決定している）価値をめざして行動を起こす。主体はそのように構成される。すなわち主体は社会の価値に対しての志向性（価値志向性）を構成される。たとえば主要な価値を報酬・自己・課題・他者とすれば、いままでの内発的・外発的動機づけは次のように定式化される（田中, 1994, p. 134の『ハビトゥス』理論参照）。

外発的動機づけ＝報酬志向性＋構成時強制感

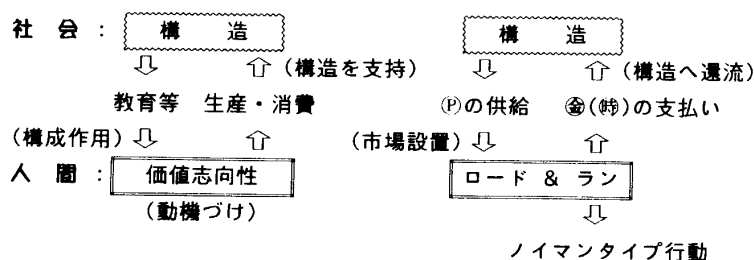
外発的動機づけ＝他者志向性＋構成時強制感（例：あの先生が好きだから勉強する。）

内発的動機づけ＝自己志向性＋構成時強制感－強制感

内発的動機づけ＝課題志向性＋構成時強制感－強制感

ここで「外発的か内発的か」は価値志向性の構成時の強制感がいかに処理されるかに依存する。したがって上記の定式化とは異なるように、たとえば報酬志向性を内発的動機づけとしたり自己志向性を外発的動機づけとしたりすることも實際上可能である。

従来の動機づけ研究は、上述のような被験者の既存の動機というものについてあまり詳述してこなかった。しかし今後は、子どもがどんな価値をどの程度に志向するかを事前に測定することが、実験・調査におけるサンプリングとグルーピングにとって重要となる（この価値志向性のテストを開発しなければならない）。



(注) ⑨はプログラムを表す。構造＝学校では子どもは時間(時)を支払う。

a. 「～したい」

b. 「“～したい”という行動をする」

図 価値志向性の行動(a)とプログラム・ローディングの行動(b)

## 2. プログラム・ローディングの行動特徴

以上の「構造論」の認識よりも現実が先に進んでいるとすれば、動機づけ研究を価値志向性の研究として構想しても遅れをとることになる。実際、現代社会における行動管理は動機の構成からプログラム・ローディングへと移行しつつある(図aから図bへ)。

なお、図bにおいて「構造」を「学校」に読み替えた場合、子どもは一般消費者のようにオカネ(金)を持っていないので、プログラム・ローディングの市場へは時間(時)を持って参入する。子どもが支払う時間によって「構成のない学校」は経済的利潤を生みだし、そのオカネを持って一般市場にリンクする。

価値志向性に代わるプログラム・ローディングは生産型心性から消費型心性への転換である(表参照)。

表 生産型心性と消費型心性の行動特徴

	生産型心性 (価値志向性)	消費型心性 (Program Loading)
生産行動	価値実現 成長的	存在確保 強迫的
消費行動	必要 充足的	蕩尽 飽和的

(注) 枠内上段は行動の目標、下段は行動の様態。

プログラム・ローディングにおいては何らかの要因に動機づけられているように見える仮現行動と、それに対応している充足の仮現感覚が“プログラム”によって指定される。そこには外的誘因も内的素因もない。

プログラム・ローディングは、動機づけのようなシグナル増大(好き嫌い、良い悪い)ではなくノイズ増大(あれはこれは)によって解発される。それは、自分という、ここにある存在を確保するメニューのひとつとしての、この自分の身体の使い方、この自分の時間の使い方にすぎない。

〈文献〉

田中敏 1994 心のプログラム 啓文社